

地域の特性を活かした児童・生徒及び教師への支援形態

— 奈良県及び京都市の視覚障害教育の事例を通して —

澤田 真弓

(国立特殊教育総合研究所)

I はじめに

視覚に障害のある児童生徒が通常学級において教育を受ける機会が増えてきました。弱視学級や弱視通級指導教室を設置する小中学校や、盲学校内に通級指導教室を設置するところも増えてきています。また、平成13年1月に最終報告が出された「21世紀の特殊教育の在り方について」や平成14年度から施行される「盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領」においても「盲・聾・養護学校の地域のセンターとしての役割」などが重要なポイントの一つとなっており、通常学級への支援の在り方が問われてきています。

ここでは、盲学校が核となり地域の弱視学級の先生方や児童生徒、保護者を支援する奈良県の事例と、弱視教室が地域の小学校の児童や先生方を、また、その弱視教室を地域が支えていくという京都市の巡回指導方式の弱視通級教室の事例を紹介し、さまざまな支援の在り方について考えていきます。

II 地域の特性を活かした支援

(奈良県・京都市の事例)

1. 盲学校がセンター的機能を担った活動

(1) 奈良県内の視覚障害教育(図1)

奈良県の視覚障害教育は奈良県立盲学校、県下唯一の視覚障害に関する専門機関です。

平成13年度においては、児童生徒数43名(幼稚部3・小学部4・中学部2・高等部普通科4・理療科30)です。

奈良県では弱視学級の設置が全国で1番多く、今年度は前年度に比べ、さらに3校増え、小学校19校、中学校9校、総数28校となっています。このうち、点字使用児童生徒が3名含まれています。平成12年度の特教育資料によると、全国の弱視学級数が116校(小学校81、中学校35)であり、その約22%を奈良県(25校)が占めていることとなります。

このように見ていくと、盲学校に在籍している小学部・中学部の子どもたちより、地域の学校で学習している視覚に障害のある子どもたちの方が断然に多いということが分かります。

弱視学級での指導形態は、通常学級で全教科指導を受けているもの、これは単独、あるいは弱視学級担任等の入り

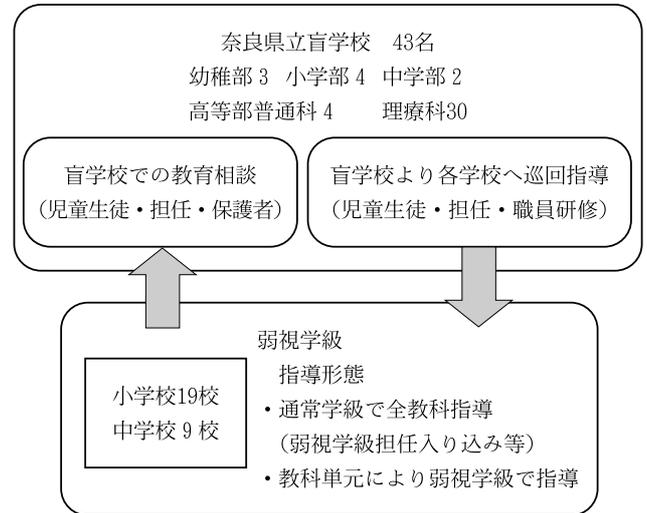


図1. 奈良県の視覚障害教育(平成13年度)

込み、また、教科や単元により弱視学級で指導を受けているものなど、子どもの実態により異なります。しかし、全教科弱視学級で指導という形態はなく、なんらかの形で通常学級での指導、係わりがなされています。

そして、弱視学級の児童生徒の実態や担任の状況により回数の違いはありますが、視覚障害教育の専門的な指導を盲学校で教育相談という形で受けています。弱視学級担任は、視覚障害教育が初めてという先生方が多く、日々の指導法や指導技術、教材等のサポートをここで受けることができます。盲学校の担当者がその子どもを実際に指導し、モデルを示します。それを弱視学級担任が参観しながら、指導のポイントを研修していきます。保護者においても子育てや進路に関する相談等、同様にサポートが受けられます。

また、盲学校からも必要に応じて巡回指導を行います。例えば、児童生徒については、学校周辺の歩行指導等、もちろん、担任と一緒に研修をし、日々の指導に活かしていきます。そして、弱視学級担任が新任で、その学校内で他の先生方に視覚障害の専門的な事項を伝達できない場合などは、校内職員研修の場を借りて、児童生徒の見え方や配慮事項について説明していきます。通常学級の中で、障害のある子どもを初めて受け入れるにあたり、どのように授業を展開していったら良いのか悩んでいる先生方も多くおり、教材教具の紹介や作成方法、テストの時どうするのか、コンピュータでの点字資料の作成方法など、実物を提示し

ながら説明していくことは、かなり問題解決につながっていくようです。これは授業を進めていく中で、何回かにわたり、具体的な教材を通してサポートしていくことになる場合もあります。

(2)「奈良県視覚障害教育研究会」の概要

奈良県では前述の通り、弱視学級の設置数が他府県に比べてたいへん多くなっています。そこで盲学校の「教育相談室」の活動の一つとして「奈良県視覚障害教育研究会(前奈良県弱視教育研究会)」をおき、次のような取り組みを行っています。

<目的>

視覚障害教育に関する研究・研修を行い、担当者の資質向上と、本県の視覚障害教育の充実・発展に努めることを目的とする。

<事業内容>

- ① 視覚障害教育の内容と方法の研究及びその実践の交流
- ② 視覚障害教育に関する研究会・講習会の開催と参加
- ③ 視覚障害教育に関する各種資料の収集と調査研究
- ④ 関係団体との連携
- ⑤ その他本会の目的達成に必要な事業

<具体的活動内容>

- ・総会1回
- ・例会4回(授業研究・視覚障害教育専門研修・施設見学・福祉機器展・視覚障害者用教材教具展・情報交換等)
- ・交流会1回(夏休み中)
児童・生徒→視覚補助具を活用したゲーム・おもちゃ作り・調理等
保護者・担当教員(内容によっては中学生以上の生徒も含む)→視覚障害教員・卒業生・親の体験談、見え方のシミュレーション、情報交換等

授業研究では、盲学校・弱視学級・通常学級での授業を参観し、研究協議を持ちます。1例をあげてみます。平成12年度の例会では、会場を会員校に移し、通常学級での授業を参観しました。点字使用の児童1名、情緒障害の児童1名が通常学級の中で共に学び、そこには通常学級担任、弱視学級担任、情緒障害学級担任、計3名の教員が入っての授業でした。教材準備のノウハウや、どのように授業を進めていくか、それぞれの先生方の役割はどのようになっているのか、一クラスの児童数の問題ももちろんありますが、それには授業前の先生方の話し合いが大切であり、重要なポイントになることなどが協議されていきました。

それぞれの学校では弱視学級が1クラス1担任であり、その学校での授業研究では、弱視学級担任という同じ立場の先生がいないので、研究協議を行っても深まらない場合があります。したがって、このように何校かの弱視学級担任という共通の立場の者が授業を参観し、話し合うという

機会は得るものが多く有意義です。

福祉機器展というのは、例年、盲学校が拡大読書器の業者を数社呼び、校内の児童生徒に新機種の紹介や複数の機種を実際に見比べることのできる機会として行っているものです。その日に合わせて本会の行事を行い、広く情報を提供していきます。

情報交換では、教科指導や教材教具、視機能について、また、進路や学級経営に関する事など、活発に意見が交わされます。例えば、全盲生徒の公立高校進学に向けて、どのような取り組みをどの時期からしていかなければいけないか、事務的なことを含めて話題になりました。県教育委員会や市教育委員会に配慮事項等の文書を送付していきませんが、これらについてもこの会を通じ、さまざまな情報を入手し、共に考えながら進めていくことができました。また、それが後に続く子どもたちにも役に立ち、実際にそれらの文書や各種教材の点訳データなどが電子情報として交換されています。

交流会では、盲学校の児童生徒も含め、同じ障害を持つ子どもたちが一同に集います。自分の将来像について具体的なイメージをつくるのが難しい子どもたちにとって、社会的に自立した視覚障害者から体験談を聞いたり、アドバイスをもらったりすることは、自己を考える上で重要であると思います。保護者においても、同じ障害を持つ子の親として、子育ての話は大変貴重で参考になります。普段、通常の学校の中で孤立しがちな子ども、親、担任にとって、交流会は大変良い機会となっており、後々までかわりを持っていくこととなります。

視覚障害に関する全国的な動向や情報は、やはり、盲学校が持っています。各種研究会・研修会等に盲学校が参加し、そこで得た情報は、この研究会を通じて県内の弱視学級の先生方に報告されます。1校に一人しかいない弱視学級の先生方の研修の場、情報収集の場となっています。

(3)盲学校内での取り組み

盲学校では、視覚障害教育のセンター的役割を担うという意識のもと、これら県内の弱視学級への支援をおこなっていますが、その他の取り組みについて次に紹介します。

盲学校在籍児童生徒の実態にあわせた、「居住地交流」、「地域交流」の取り組み。居住地交流は盲学校に在籍しなければ行っていたであろう地域の学校との交流です。これは居住地での人間関係を作る等、親子共々、地域のつながりの中で生活をしていくための大切な取り組みであると考えます。また地域交流は、盲学校近辺の学校との交流です。障害を併せ持つ子どもたちは、ろう学校や養護学校との交流も行っています。内容は、それぞれの実態により、教科学習に入り込む場合、あるいは行事交流のみの場合もあります。

「体験入学」の実施や、「卒後支援」として、進学先の大

学や就職先での支援を行います。卒業後、生徒たちがそれぞれの場で、自己実現できるように盲学校の持っている専門的な知識技能や情報を生かして、個々に応じた支援を行うことが大切です。

地域の人たちへの理解啓発活動としては「学校開放」や「開放講座」を行っています。これらの催しは、地域の広報誌に掲載し参加者を募ります。「学校開放」は、授業公開や座談会、視覚障害者用の便利グッズの紹介等を行います。地域の高齢者の方々からは、この便利グッズや拡大読書器などの紹介は、大変喜ばれています。「開放講座」は、点字講座や視覚障害者のガイドの仕方等の講座を開きます。もちろん視覚障害理解啓発になりますが、ボランティア養成にもつながっていきます。

また、「中途失明者への支援」では、県下に1校しかない盲学校の役目であるにとらえ、各種相談を受けています。

県内の眼科医や福祉事務所・保健所等とも連携をとる取り組みを行います。医師会の集まり等に盲学校での各種の取り組みを説明しに行ったり、県内の大きな病院には直接話に向きます。その他のところへは盲学校のリーフレット等の案内を送付します。

これら一連の取り組みには、安全管理の問題や人の問題、経済的問題が絡んできます。だからといってなにも行わないのではなく、管理職や教育委員会とも話し合いながら、実践を積み上げ、その必要性を声を大にしてあげ、組織化していくことが必要でしょう。

2. 京都市巡回指導方式「新道小学校弱視教室（アイリス教室）」の活動を通して

(1) アイリス教室の概要

京都市では、平成5年度に「通級による指導」が制度化されたのを受け、弱視教室がスタートしました。この市では、
1) 対象児童の在籍校が市内各地に点在していること
2) 対象児童の障害の実態から遠距離通級が困難であること
3) 在籍学級での指導上の配慮等について、学級担任への助言が不可欠であること
という理由から、弱視教室担当教員が、対象児童が在籍している学校を訪問して指導する『巡回指導方式』を開始しました。

平成5年設置以降の児童・在籍校・担当者数の推移は(表1)の通りです。なお、担当教員は新道小学校に籍を置き、指導対象児童在籍校の兼務辞令も発令されています。

表1. 児童・在籍校・担当者数の推移

	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度
児童数	7人	10人	14人	19人	18人	19人	18人	17人	12人
在籍校	7校	10校	13校	17校	15校	17校	17校	17校	10校
担当者	1人	2人	3人	4人	4人	4人	4人	4人	3人

兼務辞令が出されているということは、担当者の意識だけでなく、巡回先の他の先生方の意識も違ってきます。子どもたちの成長と一緒に考えていく仲間として、共にやりやすすくなります。

<指導形態>

指導形態は、児童一人につき2～6単位時間の巡回指導(個別抽出指導、在籍学級の中での指導)の他、学年スクーリング(各学年1回)、全体スクーリング(年4回)やサマースクールでの指導を行います。

<指導目標>

- ・対象児童一人一人の能力・特性に応じて、視知覚機能や補助具の活用に関する学習などを行うことで、個々の児童の発達の可能性を最大限に伸ばす。
- ・個別の指導やスクーリングを通して、障害に対する前向きな姿勢を培い、自らの生活を切り開いていく意欲と態度を育てる。
- ・児童の学級担任と話し合いながら、在籍学級の中で、適切な教育的配慮が行えるようにする。

<指導内容>

- ・視力を最大限に活用できるよう、上手な見方や観察などの訓練、運動などの訓練、目と手の協応の訓練。
- ・拡大教材やレンズなどの補助具を使って見やすくして学習することで、学習意欲を引き出す。
- ・文字や図形を正確に書く、表やグラフの見方に慣れる等、教科学習の内容に応じた指導。
- ・一人一人の課題に応じて個別に指導し、見えにくさからくる学習上のつまづきを補う。

(2) サマースクール(京都市野外活動施設「花背山の家」(1泊2日)での支援(平成11年度))

次に、アイリス教室での特徴的な取り組みであるサマースクールについて紹介します。

<目的>

- ・アイリス教室児童の交流を図る。
- ・家庭から離れ、普段とは違った環境の中で協力して生活することにより自立心を育てる。
- ・自然の中で十分身体を動かすとともに、視経験を豊かにする。

<参加者>

- ・アイリス教室児童18名
- ・新道小学校校長1名・在籍校校長1名・京都市指導主事1名
- ・アイリス教室担当教員4名
- ・ボランティア8名
- ・元アイリス教室教員(現養護学校教員)と現職場の同僚3名
- ・在籍学級担任1名
- ・視覚障害リハビリテーション協会から地域支援事業とし

て教育・福祉・医療の専門家をスタッフとして派遣3名
 ・国立特殊教育総合研究所1名

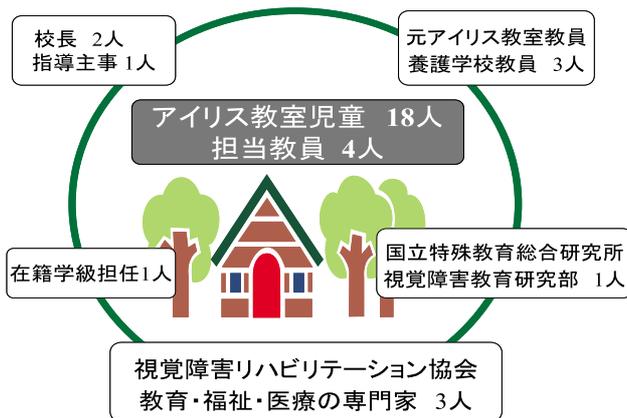


図2. サマースクールでの参加者

(図2)に示したように、このサマースクールでの特徴は、このように外部の人間が支援者として入り込み、一緒に活動ができるということです。

<主な支援内容>

これら支援者が入ることにより、活動がさらに活性化されます。その内容は次の通りです。

専門家スタッフがボランティアとして入っているの、弱視教室にない補助具の貸し出しや補助具の選定と使用方法についてのアドバイスを得ることができます。そして、ダイナミックな活動を展開するためにも、グループ活動での安全確保に当たることができます。また、スタッフ・ミーティングでは、各分野からの意見を聞くことができ、お互いに良い研修の機会ともなっております。さらにさまざまな人間関係の輪によって、新たな出会いがあり、今後の地域での相互支援への展開、連携のきっかけ作りにつながっていきます。

(3) 理解教育の取り組み例

資料としてあげてあるのは、アイリス児童在籍校の他学年の学級で指導した理解教育の指導案です。

これは、在籍校の教員が指導をしたり、アイリス担当者が巡回時の空き時間を利用して指導をしたりしています。アイリスの子どもたちが生き生きと学校生活をおくるために、このような取り組みを、学級から学年へ、また学校全体へと広げていくことが大切です。

(4) 市教委の理解啓発への取り組み

京都市教育委員会では、養護学校や小学校の育成学級、通級指導教室での教育についての理解・啓発を図るため、京都市私立幼稚園協会や京都市保育園連盟など17団体で構成する「京都市ノーマライゼーションへの道推進会議」との共催で、障害のある子どもの保護者や幼稚園・保育所(園)の職員、福祉事務所、保健所等関係職員を対象に、「出会いとふれあいのオープンスペース」(養護学校・育成

学級・通級指導教室見学会)を開催しています。

(5) 授業研究会の取り組み

アイリス教室担当者はそれぞれ巡回先で授業研究会を行います。会場校の先生方が多数参加し、在籍学級担任も交え、弱視児の視知覚や補助具、配慮事項等についても話し合いが持て、校内の先生方にも理解が広がって行きます。

(6) 京都視覚障害教育フォーラム

京都には盲学校をはじめ、関西盲導犬協会や京都ライトハウス、ロービジョンクリニック等、さまざまな視覚障害関係の機関があります。そのような中で「京都視覚障害教育フォーラム」という取り組みがあり、そこにアイリス教室の先生方や子どもたちも参加をしています。

このフォーラムは、京都の視覚障害児・者の教育・福祉・医療に携わる人々やよりよいサービスを求める人々のネットワークを創り、実践をより豊かにしていくための研究活動や視覚障害児などのレクリエーションを行うという目的で、平成6年9月に結成されました。

結成以来、「視覚障害児の教育」「点字指導」「全盲児童のための触地図などの教材づくり」「弱視レンズの利用法」「盲人ガイドの実技」「京都の視覚障害教育機関についての交流」などをテーマに学習会を重ねています。

近年は「ロービジョン」に焦点を当て、「眼科医の立場から見た視覚障害リハビリテーション」「眼科関係者のための弱視疑似体験セミナー」などの講演会やセミナーを開催しています。また、盲学校や一般の小・中学校に在籍する視覚障害児童生徒やその家族のためのレクリエーション活動を継続的に実施しています。視覚障害児童生徒とその家族がロービジョンを補うツール(ルーペ、単眼鏡、遮光レンズ、拡大読書器など)の利用方法について、講義や実技を通して学べる機会とするように、ゲームや野外活動を通して交流を深めています。

このように、医療・福祉・教育の関係者がかかわっている場での出会いは、アイリス教室の児童にとっては、卒業後、あるいは一生涯の支援のよりどころになっていくであろうと思われます。

また、先生方にとっては専門研修の場となり、資質の向上につながっています。

Ⅲ 今後の支援の在り方・課題

<p>支援のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の特性を活かしたシステム作り ・地域への啓発と相互支援協力 地域に開かれた学校 ・早期から生涯教育を見据えた支援 スムーズな移行→連携 ・職員研修とミーティング ・柔軟な支援を支える管理職・教育委員会
--

地域によって様々な実態や状況があり、一律にこの方法が良いとは言えません。むしろ、地域の特性を活かした、地域の状況に合わせたシステム作りが大切です。各都道府県により、利用できるリソースに違いがあるのが現状です。県内に視覚障害関係の機関が盲学校1校となれば、その果たす役割はたいへん広がってきます。また、盲学校も複数あり、他に関係機関がある場合は、それぞれの役割を明確にしながら連携をとっていく必要があるでしょう。視覚に障害のある児童生徒がすべて同じ支援でいいかというところではなく、個々の子どもたちによって当然違います。個々の状況に合わせた連携の取り方、地域のボランティアや医療関係や福祉センター、リハビリテーションセンターといった関係諸機関と連携をとることが大切です。それには話し合いが必要でしょうし、コーディネータ役も必要になってくるでしょう。

そして、早期から一生涯の教育を見据えた支援、それぞれの節目でスムーズに支援の移行ができるように連携をしていくことが重要です。

また、県内だけでなく、全国に目を向けて、共通で活用できるものはお互いに活用していくことが効率的です。例えば、点訳教材や各種教材教具、さらにはさまざまな情報まで、共有していくこと。電子化されたデータや情報をインターネットを介して互いにやり取りをしていく「盲学校点字情報ネットワーク」の活用も一つの方法であると考えます。

また、地域によって交通の利便性にも違いがあります。遠隔地対策の必要などもあるでしょう。電話相談、巡回相談、長期休業中の来校やスクーリング・サマースクール、今後、インターネットの活用も考えられると思います。

それから、地域への啓発と相互支援協力等、外部の人たちが学校の中に入っていけるように、また、内部からも外へ出ていけるように、地域に開かれた学校作りの必要があります。これからの学校においては、児童生徒の実態、地域の実情等を基に、特色ある教育や一人一人の個性に応じたきめ細かな指導が大切となります。学校は地域住民の信頼に応え、家庭や地域と連携協力し、一体となって子ども

の成長を図っていくために、より一層開かれた学校づくりを推進していかなければなりません。こうした開かれた学校づくりを推進していくため、学校運営の状況等を伝えながら保護者や地域住民等の意向を把握・反映し、その協力を得ていく制度、学校評議員制が導入され始めてきています。これらのことも含めて考えていくことが必要となるのではないのでしょうか。

また、これらさまざまな取り組みは、一部の先生のものであってはならず、校内組織としてしっかりと位置付け、全体の共通理解を図り、かつ専門性も高めあいながら行っていくこと。それにはやはり校内研修や話し合いを十分行うことが大切です。そしてその研修も従来のスタイル、伝達講習的なものばかりではなく、問題解決的な研修スタイルも取り入れたものが有効ではないかと考えます。

従来の学校の枠内で教育の在り方を考えるという発想ではなく、保護者も含めた地域・機関・団体など、あらゆるリソースを活用した柔軟な支援が重要であり、それら支援を支える管理職・教育委員会の協力も大きなポイントの一つとなるでしょう。

謝辞：本研究では、奈良県立盲学校を事務局としております「奈良県視覚障害教育研究会」や京都市立新道小学校アイリス教室のサマースクール等の活動に実際に参加させていただきながら進めてまいりました。沢山の先生方にご協力をいただいたことを心より感謝いたします。

【参考文献】

- 中東朋子・小川清子・松井眞弓：弱視学級（アイリス教室）サマースクールの取り組み，第5回視覚障害リハビリテーション研究発表大会論文集，142-145，1996
- 中野泰志：コミュニティのサポート・ネットワークを活用した地域活動の支援，国立特殊教育総合研究所特別研究報告書「教員の資質の向上と教員支援システムに関する研究」，111-117，1998

<資料>

道徳学習指導案（アイリス教室について）

1. 日 時 平成13年1月26日（金）
2. 対象児童 4年
3. 本時の目標 擬似体験を通して、アイリス教室の友だちについて考える。
4. 本時の展開

学習内容	児童の活動	教師の支援と留意点
① 本時のめあてを知る。	担任の先生よりめあてを聞く。 「アイリス教室の友だちについて考えてみよう」	
② 擬似体験のめあてを知る。	アイリス教室の友だちについての説明を聞く。 「アイリス教室の友だちは見えにくさがあり、そのために勉強や運動をする時にむずかしいことがあります。」 擬似体験のめあてを聞く。 「今日は見えにくいとはどんなことかということを経験してもらい、アイリス教室の友だちの苦労や努力について考えます。」	アイリス教室の児童の見えにくさについてはここでは詳しく説明しない。 シミュレーションメガネをかけて体験する中で、見えにくさ・困難さを自ら見つける場を設定する。
③ 見えにくさを体験する。	シミュレーションメガネをかけて二つの活動をする。 ・教科書を見る。 白濁メガネと狭窄メガネの両方を体験する。 ・図書室へ行く。 階段・廊下・図書室入室・本を選ぶ。 帰りは逆コースを通して教室へ帰る。	<ul style="list-style-type: none"> ・今日のシミュレーションの見え方は一つの見え方で、実は一人一人違う見え方をしていることを話す。 ・図書室へ行く時はペアーの人が横について、本当に危ない時は声をかけたり、腕を持って知らせてあげるように児童に話す。 ・見えにくさを実感する為に横に着く人については、してはいけない声かけや手助けについて具体的に示す。
④ 体験したことを話し合う。	「いつもの見え方と比べてどうだったか。」を発表する。 ・まわりが見えにくい。 ・階段が見えなかった。 ・教科書の字がぼやけて見える、など。	意見が出にくい時は、体験した場面ごとに問いかける。
⑤ どんなことに気がつければいいのか発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板が見えにくいときはノートを見せてあげる。 ・物を探すのに困っている時には手伝う。 	
⑥ 感想をプリントに書く。		「見えにくさ」などの感想がたくさん出るように、同じ意見でも自分の言葉で言えるように励ましの声をかける。

5. 評価 シミュレーションメガネを体験することによって、アイリス教室の友達の「見えにくさ」に気づいたか。